

# 東国の人物埴輪群像と死者儀礼

杉山晋作

- 
1. はじめに
  2. 死者と人物埴輪に関する諸説の課題
  3. 生前生活表現説の可能性
  4. 関東の特性と人物埴輪群像の盛行
- 

## 論文要旨

墓を壮大にした古墳時代の日本では、埴輪が古墳へ樹立された。とくに5世紀に出現した人物埴輪は6世紀になると関東に偏って盛行し、それを樹立した古墳の数も関東にもっとも多い。

その人物埴輪群像は死者を送る葬列や殯を行う儀礼や首長権を継承する儀礼を表現したものであり、原則として死者の姿は埴輪に表わされていないとする見解がある。それらの諸説では、埴輪群像が表現する情景と、死者を埋葬した古墳に埴輪を樹立した意味との関連を明快に理解しがたい問題がある。そこで、人物埴輪群は死者が生前に活躍した情景を表現したとし、そこに被葬者の生前の姿が存在してもよいと解釈すれば、人物埴輪群で表現された情景があった時期と、その人物埴輪群が古墳に樹立された場面のもっとも有効であった時期と、さらにそれが古墳に残った時期の、異なる3つの時点における当時の人々の意識を合理的に説明できるであろう。

6世紀代の関東では、人物埴輪群像の樹立と前方後円墳の造営が時を同じくして盛行した点が注目される。関東の地方豪族やその子弟が舎人としておそらくはその子女もまた采女として近畿に出仕したことが近畿の政権を支える基盤ともなったという背景を考慮すれば、関東では一人の人物が地方豪族の一員としての性格と中央組織での官人としての性格の二面性を持つと強く意識されるに至ったと考えられる。それ故、たとえ小型であっても前方後円墳を作り、人物埴輪群を樹立するという古い葬送観念維持の特性が関東に生じたのであろう。彼らの埋葬に先立ち古墳での最後の儀式として死者の功績を讃える場面に際し、視覚的にも効果があるとしてその生前業績を表わした人物埴輪群を樹立したと考える。さらに、人物埴輪群が葬送終了後も古墳に残ったのは、それが死者の業績を顕彰する碑的存在として使える効用を持ち、また、現世に生きる人達が死の世界の死者に永遠に奉仕したいとする意志の代弁ともなったからであろう。